

初期ヘーゲル哲学における啓蒙思想観の形成

岩田 健佑（社会学研究科 修士課程）

本発表では、G. W. F. ヘーゲルの初期著作及び草稿を検討することで、ヘーゲルがどのようにして啓蒙思想に対する評価を形成していったのかを検討する。

ヘーゲルが啓蒙思想に対して批判的な態度をとっていたことはよく知られている。主著の一つである『精神現象学』（1806）においては、啓蒙思想は自分自身では積極的な内容を持たないにも関わらず有用性を求め、信仰に対して形式的な批判を繰り返すものであると定義されている。さらにそうした無際限の批判の結果として「絶対的自由と恐怖」と題される政治的不寛容、すなわち革命を引き起こすものでもあるとされ、啓蒙思想に対しては総じて否定的な評価がなされている。この図式は、後年ベルリンで行われた歴史哲学講義においても繰り返されている。すなわち、『精神現象学』以降のヘーゲルにとって啓蒙思想とは第一に宗教への批判を主とする思想として定義されるものであり、第二に革命の原因とされるものである。このような観点において、啓蒙思想とは、ヘーゲルが積極的に提示する哲学に至るための重要な契機ではあるが、決して肯定的評価が与えられるようなものではない。すなわち、啓蒙思想は歴史的に一定の意味を有していた過去の思想であり、現代においてはその破綻を参照することしかできないようなものである。

しかしヘーゲルは、そのような啓蒙思想への評価を一貫して有していたのであろうか。言い換えるならば、『精神現象学』以前のヘーゲルもまた、啓蒙に対してそのような定まった評価を有していたのだろうか。神学生であったヘーゲルがテュービンゲン神学院において啓蒙思想に親しみ、フランス革命を賛美していたことは、ヘーゲル自身の草稿やローゼンクランツによる『ヘーゲル伝』（1844）から容易に窺い知ることが出来る。さらにヘーゲルは、後にF. シェリングらの同一哲学とロマン主義に傾倒し、そして『精神現象学』において、自らが与していた同一哲学及びロマン主義への批判に転じた。このような一般に知られている遍歴を踏まえるだけでも、ヘーゲルの啓蒙思想に対する評価が『精神現象学』以前には不安定なものであったことは想像に難くない。

そこで本発表においては、ヘーゲルが『精神現象学』に至るまでに、どのようにして啓蒙思想に対する評価を構築していったか、とりわけ、どのようにして啓蒙思想を宗教批判の思想とみなし、さらに革命と関係づけるようになったのかを時系列に沿って考察したい。特に『ドイツ憲法論』（1802）に見られるような宗教批判と近代国家との関係がどのようにして啓蒙思想と関係づけられるようになったのかを主軸として考察する。